各国農業普及事情の比較分析 ＜その 3＞

農家との距離

本シリーズでは各国の普及業務や普及事情について、4 つの切り口から検討している。今回はそのうち「農家との距離」について検討した。

パレスチナは農家数に対して、普及員の人数が少なかった。シリアでは普及所は多くあったが、移動手段が限られていた。パキスタンでは住んでいる街から担当地域が遠すぎて、一度も行ったことがないという普及員もいた。モンゴルでは、広大な土地に少数の農家が点在していたことから、普及活動が非効率にならざるを得なかった。国の事情により理由はさまざまであるが、普及員がなかなか現場に行けないという状況は共通しているようである。その一方で、そもそも如何に普及体制を充実させようと、普及員がすべての農家を頻繁に訪問するということは困難である。そのため現場では農家の組織化をすすめたり、様々な普及手法が開発・実践されたりしてきた。また近年デジタル技術の発達が著しく、その恩恵は途上国の農村部にも届いている。この度のコロナ禍もあり、デジタル技術を活用した普及手法も様々なかたちで取り組まれている。こういった技術が普及員と農家の物理的な距離を縮め、よりスムーズな普及活動の形が今後生まれてくるかもしれない。

次に、普及員と農家との心理的な距離について考えてみたい。そもそも農家との心理的な距離はなぜ生じるのか？それはどう縮めることができるか？その点について 2014 年にネパールで実施した JICA 筑波野菜栽培技術コースの帰国研修員活動調査で興味深い話を聞いた。帰国後、数年たった普及員に本邦研修を経て、自分で変わったと思う点を尋ねたところ「自信を持って農家を訪問できるようになった」という答えが返ってきた。以前は「農家を訪問するのが怖かった」というのである。「知らないことを聞かれるのが怖いので、農家に行きたくなかったし、行っても一方的に話をしてばかりだった。しかし本邦研修を経て、野菜栽培技術を習得したことが自信となり、余裕をもって農家の話を聞けるようになった」というのである。同様の話は他の帰国研修員からもよく耳にする。もう一つ、シリアの事例が興味深い。同国の普及員は計画経済の監視役のような側面もあり、技術面で農家から信頼されているとは言い難かった。しかしながらプロジェクトが、普及員に灌漑技術を研修し、灌水量測定に必要なキットを持たせて、農家を訪問させたせたところ、効果的な普及活動をすることができた。農家の前で灌水量を測定し、要水量と比較して見せたことで、普及員として農家に信頼されるようになったのである。つまり普及員が行う技術的な営農支援が、少しでも役に立つと農家が感じた時、心理的な距離が縮まったと考えられる。またこの場合も、普及員は「自信をもって農家を訪問できるようになった」と話している。

農家圃場で灌水量測定をする普及員（シリア）

前号で、普及員に求められる技術力とは、専門的な知識・技術というよりも、現場の問題を探るための観察力、問題分析力、コミュニケーション能力といった総合的な現場力ともいえるものではないかと考察した。そして、その現場力を高めるためには、場数を踏むことが大切だと述べた。しかし、普及員が現場に出るための最初の一歩を踏み出し、農家の信頼を得るためには「自信」となるもの、つまり何か一つ、本人のよりどころになり、そして農家が「お!?」と思うような、ちょっとした専門的な知識や技術を身に付けることが大切なのかもしれない。そして、その技術が受け入れられ、農家に頼られると、今度は現場に出るのが楽しくなる。自然と場数を踏む機会は増え、普及員としての技術力・現場力が高まることに繋がるのではないかと考える。